

年 組 ( 番 ) 名前

記入日 月 日

## 記事2

## 生まれつき本嫌いな子はいない

「うちの子は本を読まない」。そんな悩みを持つ親は多いと思います。学習塾「花まる学習会」(本社・さいたま市)代表の高浜正伸さんに、本に親しむためのコツをうかがいました。

「6年生なのにまだそんな本を読んでもの?」「読み終わったの?」「……ついつい、こんな言葉を投げかけていませんか?」

◆ 「うちの子どもは本を読まない。親は子どものためと思って難しい本を薦めてしまいがちですが、押しつけは、子どもの読む気をそいでしまします。生まれつき本が嫌いな子どもは一人もいません。本が嫌いになってしまう環境があることが原因だと思っています。読書は学習のためではなく、それ自体に意味があるというのを忘れてはいけません。読書は楽しい時間であって、子どもたちは楽しさが根

底にあってこそ結果的に学びを得られます。

親子で読書を楽しむ時間を作ることもおすすめです。家庭では、どんなに忙しくても、毎日5分だけでもいいのです。絵本の読み聞かせは幼少期だけではなく小学校高学年にも進めています。本を読む人と心の結びつきが生まれ、一緒に楽しい時間を過ごした経験は、本を好きになるきっかけになると信じています。

(2021年6月1日読売新聞朝刊より)

## 記事1

## 「本の声」を聞こう

読売新聞の読書面で人気を集めた連載「現代×文芸 名著60」の選者の一人、東大教授の阿部公彦さんに本を読む楽しみについて聞きました。

「現代×文芸 名著60」は、2019年4月から2020年9月まで掲載された連載企画。現代日本文学の名作60冊を紹介した。阿部さんは、村上春樹さんや小川洋子さんなどのベテランから、村田沙耶香さんのような旬の作家まで、「まだ文学の歴史になっていない作品をどうリスト化するかが難しかった」と選考の苦労を振り返った。

読書の魅力について阿部さんは、「最近『役に立つ』ということがよく言われる。『役に立つ』と言う際は、『目的』がある。でも、小説はある目的のために読むのではなく、作品に

『出会う』こと自体のために読んで」と話す。「書かれる内容の多くも、知らない人物同士が出会う話だ」と語り、本がもたらす偶然的出会いの価値について強調した。

さらに、「読書とは、自分の心を静かにして本の声を聞くこと。本を読むことを重ねれば、実社会でも他人の声をじっくりと聞けるようになると思う」と読書の効用を話した。「自分が

読んだ本のことを、誰かと話すのも楽しい。話すうちに、自分の考えに気づくこともある」とも語った。



(2021年5月30日 読売新聞朝刊より)

1 記事2は、主にどのような読者に向けて書かれた記事ですか。高浜さんが語りかけている相手は誰かを考え、適切なものを選びましょう。

- ① 小学6年生  
② 小学校の先生  
③ 小学生の子どもがいる親

2 記事1で、阿部さんが話している読書の魅力は、何だと言えますか。記事中から6文字で抜き出しましょう。「 」や『 』も1文字に数えます。

--	--	--	--	--	--

3 阿部さんの意見にA、高浜さんの意見にB、二人に共通する意見にCを書きましょう。

- ( ) 読書は、目的があってするものではなく、そのこと自体に価値がある。  
( ) 子どもに対する親の読書の押し付けは、子どもを本から遠ざける。  
( ) 読書に親しむと、他の人の意見にも耳を傾けることができるようになる。  
( ) 本の読み聞かせは、幼い子どもだけでなく、小学校高学年にも効果的である。